

探梅行

森岡 正作

うしろ手に

狼のゐるを信じて山拜む
ぬくもりの言葉を探し落葉搔く
祝ぎ詞選び損ねて女正月
冬木立時空斜めに一羽翔つ
俎板に寝て寒鯉の大欠伸
臘梅の枝箸置きに今朝の宿
鳥声に真似たる笛も探梅行

大寒の頃、春を待ち遠しく感じる心は皆同じであろう。「冬来たりなば春遠からじ」と言う昔の人の言葉にすがっている。それでも、暦の上では間違いない春はやって来るのであるが、北国の人々にとってはむしろこれからが冬本番という思いに違いない。

登四郎先生に「うしろ手に扉をしめ冬の去る思ひ」という句がある。その自註に「冬の寒さにもっとも弱い私は二月が終わるのが待ち遠しい。何かしらほっとした気持を詠った」とある。寒がりの先生の姿が目に見えるようであるが、私には都会人と雪国人の違いをみる思いがする。暦とは関係なく、雪が消えて初めて春を実感する人に対して、梅が咲いても寒い日が続き、三寒四温のような日々に一喜一憂する都会人の姿である。そう言えば、東京へ来て初めて木枯しに遇った時、吹雪の中にいるよりも冷たく感じたことを思い出す。